

「食糧生産と飢餓の歴史」について

1997年。イギリスのブレア首相（当時）が追悼集会でアイルランド国民に謝罪の手紙を読み上げた。内容は、1840年代のジャガイモ飢饉当時のイギリス政府がとった対応に非があったことを認めるものだった。アイルランドのブルートン首相（当時）が答えた。「その言葉は過去と率直に向き合うものであり、心の傷を癒し未来につなげるものである」。

160年後の謝罪の真意はどこにあったのか。それは単なる過去の謝罪か。それとも現代の世界でも飢饉が起こることを想定したものだったのか。確かにアジア・アフリカの国々の中には食料不足や貧困に苦しむ国がある。しかし、国連の報告によると、世界では70億の人口を養えるだけの食糧が生産されている。私は、飢饉の歴史を調べることで、現代で飢饉が起こりうる可能性を考えてみた。その際、アイルランドのジャガイモ飢饉とインドのベンガル飢饉を取り上げた。

ジャガイモがアイルランドに持ち込まれたのは16世紀末と推定されている。北緯50度の高緯度の位置するアイルランドは気温が低く、瘠せた土地が多い。アイルランド人はジャガイモの品種の1つであるランパー種を単作栽培した。当初は自宅で栽培する程度だったが、徐々に主食となっていく。ジャガイモは米、小麦、トウモロコシの三大穀物が育たないような高地や乾燥地でも育ち、生育期間が二カ月半と短いのに加え、栽培に手間がかからず、鋤で土を盛って苗床を作り、家畜の糞などの肥料を施して種イモを植えるだけで、あとは放置していてもよく育ったからだ。また、アイルランドを支配していたイングランドの支配階級にとっても、小作人の主食がジャガイモに置き換わる方が、小麦などの穀物の収奪には都合がよかった。アイルランドではジャガイモが主食になるにつれて人口が急激に増加し、記録によると、1760年の150万人から1841年には817万人へと急増している。

まさに人口爆発のピーク時にジャガイモの疫病がアイルランドを襲うことになる。1845年のことだ。アメリカで発生したイモグサレ病という疫病がヨーロッパの大陸側からアイルランドに上陸する。ジャガイモは交配を経ずに塊茎で栽培されるため、疫病を急速に拡大させさせる。ランパー種がこの疫病に弱かったことに加え、気候変動の影響が重なり、その年の収穫の約4割が失われた。1846年は、飢えた人々が種イモを食糧に充てたため作付面積が3分の2となり、さらに1848年には再び疫病が広まり、収穫がほとんどないという状況だった。アイルランドの人口は1851年には655万人へと減少した。人口増加率から判断すると、その年は人口900万人をこえると見られていたので、100万人がアメリカ大陸などは移民し、150万人が餓死や栄養不足による病気で死亡したと見積もられている。

しかし、ここで疑問が生じる。ジャガイモ不足だったとしてもほかの穀物で補うことはできなかったのか。また、当時、社会保障制度が十分に整備されていなかったとしても、なぜ政府は多くの餓死者が出るまで放置していたのか。

アイルランドは17世紀に Cromwell が率いる軍に制服されて以降、イングランドの植民地状態にあった。プロテスタント系のイングランドは異教徒刑罰法を作り、カトリックが土地を所有することを禁止した。これに伴って、カトリックの多いアイルランドの土地は

没収されイングランド人に分配された。土地を追われたアイルランド人の多くは小作人や都市や地方の労働者となった。穀物価格が安定していれば、小作人は借地料や税金を払ったうえでなんとか生活できたが、価格が下落すればたちまち支払は滞り、地主によって立ち退きを余儀なくされた。また細々と暮らしていた労働者たちは、イングランドからの安価な工業製品の輸入が増えるにつれ、仕事を奪われていった。こうしてアイルランド人の貧窮は度を増していった。

この事態に対するイギリス政府の対応は不十分だったと言われている。飢饉当時の支配階級は、借地料の不払いで強制退去させたアイルランドのカトリック農民をスコットランドやイングランドのプロテスタント農民に置き換えればよい、という考えだった。このためイギリス政府は十分な政策を講じなかった。例えば、アイルランド人が飢餓状態にあるにも関わらず、アイルランドからイングランドなどに大量の穀物が輸出されていた。しかし、イギリス政府はそれを規制しなかった。また、食糧不足を解消するために安価な穀物を輸入しようとしても、穀物の維持を目的とする穀物法がそれを阻んだ。

1943年に起きたベンガル飢饉はどうだったのか。ベンガル地方はインドの東部、ガンジス川の下流のデルタに位置している。第二次世界大戦中の当時、インドはイギリス領であり、敵国だった日本がビルマ（現ミャンマー）まで迫っていた。この戦時経済の下でインフレーションが起こる。人々の主食のコメの価格も高騰する。このインフレと米価高騰について、インド出身の経済学者であるアマルティア・セン（ノーベル賞受賞）は①軍事部門と民間部門の戦争支出の拡大がインフレ圧力になっていた②コメへの投機とパニック的貯蔵で市場へのコメの放出量が落ち込んだ③政府がコメの価格統制を廃止したことなどを原因として挙げている。また、インド人作家のマドゥシュリー・ムカージーは、当時のイギリス首相がインドの食糧支援要請を拒否して食糧を軍用を振り向けていたと指摘。その背景にはイギリス首相のインド人に対する嫌悪感があったと述べている。

食糧生産が落ち込んだわけではないのに、ベンガルでは米価が1年で5倍にも跳ね上がった。一方、魚やミルク、竹ざおなどの物資や労働者の賃金や散髪料などサービスの対価は緩やかな上昇にとどまった。このため、これらの職業に従事する人たちは相対的に食糧の入手が困難になり、貧困化していった。センによると、特に農村部の漁民、籾摺りなどの農業労働者（農民ではない）、職人が特に生活に困窮した。彼らはコルカタなど都市部に移住した。しかし、彼らは健康状態や衛生状態が悪く、市内のあちこちで死体となって放置されたという。また、農村部でも伝染病のマラリア、コレラ、天然痘が流行し、死亡率が上昇し続けた。その結果、死者数が300万人とも400万人とも言われる大飢饉となった。

このように見てくると、ジャガイモ飢饉とベンガル飢饉の相違点がはっきりしてくる。ジャガイモ飢饉は不作が引き金になったが、ベンガル飢饉は食料不足ではなく米価の暴騰による食糧入手が困難さが主因だった。凶作＝飢饉という簡単な図式は成り立たない。共通点としては、飢饉の被害者の大半が低収入の生活困窮者であったこと、飢饉に対する行政府の見通しが甘かったこと、社会構造や人種または宗教的な偏見のため行政による真摯な救済策が講じられなかったことが挙げられる。センは「貧しい人々に食糧を買えるだけの所得を創出すれば、飢饉は防止できる」と語っているが、どちらの飢饉でも政府の真剣さや決意が欠けていたために飢餓状態が増幅された。その意味で「人為的」側面があったということができるだろう。

では、現代の状況はどうか。地球温暖化のような気候変動がある。世界経済の不安定化で、先進国でも貧困層が増加しつつある。また、人種差別的な憎悪表現が問題にされてもいる。これらは飢饉をもたらす条件と重なるように思われる。一方で、飢饉の一因になる食料不足を解消するための取り組みが進んでいる。EU（欧州連合）は栄養価が高く飼育費用の安い昆虫食の研究を始めているし、ジャガイモも品種改良を重ね、野生種を含めその種類を5000種に増やしている。コメについても、アジアを中心に寒冷地や低肥料の土壌に対応した品種、多収穫の品種などが作り出されている。

ただ、飢饉の芽を摘むためにもっと大切なことがある。私はそれをセンの言葉に見つけた。。公衆が自ら政策に働きかける「公共行動」だ。センは講演で「公共行動は政府が公衆の要請に応え、公衆の状況に関心を払い、迅速に行動しようとする政治的インセンティブを高める」と語っている。冒頭のイギリス首相の160年後の謝罪も公衆の公共行動に応えるという意味があったのかもしれない。飢饉の歴史を繰り返さないために。